様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１３２

研究課題名（和文）中世末期ヨーロッパ北方美術におけるユーモア表現

研究課題名（英文）Humour in the Late Medieval Northern European Art

研究代表者
元木　幸一（MOTOKI, KOICHI）

山形大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：１０１２５６６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパ北方美術のユーモア表現は、ゴシック聖堂内彫刻の笑顔から発展し始める。それら笑顔を意味で分類すると、天国に入る人に与えられた祝福された笑顔、悪魔の笑顔、肖像における笑顔、死の笑顔、道化の笑顔などになる。笑顔が美術作品を見る人の笑いを誘うのである。
他に笑いのテーマ・手法としては、以下に分類される。あべこべの世界、遊戯、スカトロジー、セックス、擬獣化（動物に演じさせる）、諺の造形化などである。これらのテーマ等は、美術諸ジャンルで相互に関連し伝播しながら発展するが、ジャンル毎の特異性もある。そして、ジャンル毎に受容者の特徴があり、半識字者から聖職者まで広がるのである。

研究成果の概要（英文）：Humorous image of the Northern European Art was founded in the smiles of the Gothic sculpture. The smiles are classified into blessed persons, devils, portraits, the dead, and fools, from the viewpoint of the meaning. The smiling faces caused beholders to smile.
We present six elements as following themes to smile; the world upside down, playing games, scatology, sex, animals, and proverbs. The themes were developed interrelating between the art genres. The receptive persons reach from semi-literate to clergymen.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ユーモア表現　ミゼリコルディア　笑い　版画　マクデブルク大聖堂　トゥティウィルス

１．研究開始当初の背景

(1)笑いの文化論は、ロシアの文学研究者バフチーンを嚆矢とする。美術における笑いの要素を研究し始めたのは 1970 年代のイタリア・ルネサンスの専門家バロルスキーだが、本格的に美術史分野からのアプローチは1990 年代になり、中世美術史家カミルなどの手でやっと開始される。

(2)中世末期におけるユーモア美術研究は、グレシンジャー、ギブソンなどによりやっと21 世紀になり本格的に始まるが、写本挿絵、ミゼリコルディア、版画、油彩画などの多彩な美術作品を対象とし、相互の関係などを考慮し、受容者をも視点に入れた研究は未だ始められていない。

２．研究の目的

(1)教会における笑いの意味–教会の彫刻や壁画の笑顔の意味を分析する。また、内陣内の聖職者席下部彫刻（ミゼリコルディア）における滑稽表現の意味を解明する。

(2)版画・板絵等での世俗美術におけるユーモア表現の手法・意味–版画のユーモア・テーマを具体的に分析し、それらと文学など他の文化領域との関係について考察する。

(3)美術の諸ジャンル相互の関係の分析–ミゼリコルディア、版画、板絵、写本挿絵などのモティーフやテーマの相互影響関係を解明する。

(4)ユーモア美術の受容者–ユーモア美術を見て笑うのはどのような人たちか、ジャンル毎に分析する。

３．研究の方法

(1)ユーモア表現の出発として笑顔の表現を取り上げ、教会堂内に笑顔が登場するロマネスクからゴシック聖堂の笑顔表現の意味を解明する。

(2)続いて笑いのテーマを分析し、諸美術ジャンル毎の表現を具体的に分析する。さらにジャンル相互の関係をモティーフ、テーマ毎に追究する。

４．研究成果

(1)　笑顔から笑いへ

ヨーロッパ美術に笑顔が登場するのは、ロマネスクからゴシックの聖堂においてである。本研究では、まずロマネスク末期から中世末にかけてのヨーロッパ北方美術における笑顔を分類し、代表的な作例を提示する。

①　祝福された笑顔

バンベルク大聖堂北側「君公の扉口」《最後の審判》（1233–35 年頃）では、中央のキリストから向かって左側の祝福された人々は、口角をあげて笑い、右側の呪われた人々は嘆きの表情を浮かべている。表情で祝福された人と呪われた人とを区分しているのである。

天国の笑顔として印象的なのが、マインツ大聖堂西内陣仕切り《最後の審判》（大聖堂博物館、1237–39 年頃）の子供の笑顔である。

同じことが、マクデブルク大聖堂北側玄関ホール「賢い乙女と愚かな乙女」（1240 年代後半）でも言える。ここでも対照的に笑顔と泣き顔で表わされるようになったのである。

笑顔は、最後の審判における祝福された人の表情として見る人たちに限りない幸福感を与え、悲しみの表情は地獄の悲惨さを伝える格好の表現ということになるだろう。

②　悪魔の笑顔

ロマネスクからゴシックの聖堂には、《最後の審判》図像で、人々を地獄に導く悪魔の笑顔が登場する。ロマネスクの著名なコンク、サント・フォワ聖堂における《最後の審判》で天秤皿を押し下げようとしている悪魔や、シャルトル大聖堂南正面中央扉口《最後の審判》（1204 年以降）の地獄に堕とされた人とカップルになっている悪魔の笑顔である。

このような笑顔の悪魔が、14 世紀ドイツでは内陣に入り込んでくる。例えばマクデブルク大聖堂内陣席（1363 年）で、聖職者席下部木彫（ミゼリコルディア）にはしばしば悪魔が登場し、皆大口を開けて笑っている。

このような笑う悪魔は、15-16 世紀には、版画や板絵にも姿を表す。版画家イスラエル・ファン・メッケネムの《スボン合戦》（1494-1503 年）で空中に浮かぶ笑う悪魔や、画家マルティン・シャフナー（1478-1548）の《最後の審判》（1500 年頃、フライブルク、アウグスティナー博物館）の地獄にいる大きく口を開けて笑う悪魔である。

さらに礼拝時の無駄話を記録し最後の審判時に地獄行きの証拠とする悪魔（トゥティウィルス）も大口を開けて笑う。聖堂内彫刻の例として 1220 年頃のボン・ミュンスター内陣仕切りやマリア・ラーハ修道院付属聖堂の西正面柱頭にいるトゥティウィルスである。この滑稽な悪魔をデューラーも素描《天使たちのミサ》や木版画『ラ・トゥール・ランドリーの騎士の書』で描いている。

③　世俗人物の笑顔

世俗人物像の笑顔を考察する。まずは、ゴシック肖像彫刻として著名なナウムブルク大聖堂西内陣のレクリンディス像（1250 年）。

レクリンディス像から 2 世紀ほど後に、彫刻家ハンス・ムルチャーは、ウルム市庁舎装飾窓（1427–30 年頃）の盾持ち人物像（原作はウルム市博物館蔵）が華やかな笑顔を表す。市民は市庁舎の皇帝に仕えるこの人物の笑顔を見ることで、皇帝に保護され、自治を与えられた我が帝国都市ウルムの恵みを感ずることができたのであろう。

④　死の笑顔

ハンス・バルドゥング・グリーンの《エヴァと死》（オタワ、ナショナル・ギャラリー）のアダム＝死の像は、歯を露出して笑っている。また 1493 年ニュルンベルクでハルトマン・シェーデルが出版した『世界年代記』の「踊るガイコツ」は、笑いながら踊る。「死の舞踏（ダンス・マカブル）」なのだ。楽しそうな装いの下に死はやってくる。

⑤　道化の笑顔

死の笑いと似た笑いを浮かべているのは、E.S.の版画家（Meister E.S.）の道化である。例えば、《恋人と道化》（1467 年頃）では、鈴付き帽子（ロバの耳のついたフード）を背に脱いだ道化がにやりと笑いながら、裸体の恋人の乳房を軽く揉んでいる。

15 世紀以降は、これら道化の顔が聖堂内陣のミゼリコルディアにも現れる。ルーヴェン、聖ペテロ聖堂（Leuven, Sint-Pieterskerk）のミゼリコルディア（南５番）、サヴォワのサン・ジャン・ド・モーリアンヌ聖堂ミゼリコルディアのような仮面（マスク）である。

(2)　笑いのテーマ

笑顔によるユーモア表現に続いて、見る人を笑いに導く美術表現をその手法、テーマにより分析しよう。

①　あべこべの世界

男と女が、ズボン、パンツなどを取り合う男女の権力闘争のテーマは、写本挿絵、ミゼリコルディアや版画にも頻繁に登場する。ただし、同じテーマでも表現は多彩である。いくつかのパターンに分けて分析しよう。

第一に、夫婦が五分五分でズボンを引っ張り合っている表現。1457-70 年に制作されたフランス、ルーアン大聖堂のミゼリコルディア（南６番）など。

第二に、女房が亭主を叩いているところを表した、ホーホストラーテン、聖カタリナ聖堂、ミゼリコルディア（南４番）。

第三に、女房が勝利しパンツを履くところ。サン・セルナン聖堂のミゼリコルディア。

第四に、男が女の仕事、例えば糸巻棒を持つ姿で表される。ブレトラン、聖パウロ改宗聖堂の 1490-1500 年作ミゼリコルディアなど。

②　遊戯

中世においては、遊戯イメージがユーモアの表象としても機能する。

チェスが現れる有名な中世美術として、シャルトル大聖堂の「放蕩息子の例え話」ステンドグラスがある。放蕩息子がチェスによる賭けをしている場面である。中世では、チェスもサイコロを用いる賭け事だったらしい。

悪行ゆえに揶揄するためのモティーフと

して、チェスに代わりバックギャモンが前面に出てくる。ロンドン、大英博物館所蔵の写本(1300 年頃マーストリヒトで制作？)など。

賭け事の中毒になってしまったことで地獄に落ちる人々の近くにバックギャモンやサイコロが描かれる。ヒエロニムス・ボスの《快楽の園》の右翼地獄、ブリューゲルの《死の勝利》などに賭けの道具が描かれる。偶然が支配する危険な勝負事なのである。

③　スカトロジー

中世末期の文学作品の主流はユーモア文学で、その中心は糞尿譚である。フランス・ルネサンス文学の代表であるフランソワ・ラブレー（1494–1553 年）の『ガルガンチュア』は、ガルガンチュアがパリのノートル・ダム大聖堂の塔上で、小便をし、大洪水を引き起こし、26 万 418 人が溺れて死んでしまったという汚辱にまみれた話に始まる。

これらの糞尿譚は謝肉祭などで上演された大衆劇でも披露される。謝肉祭劇は常識的な倫理観を否定し、セックスとスカトロジーを主要なテーマとした。特に、舞台で直接的に表現されるのはスカトロジーの方だった。ニュルンベルクのハンス・ザックスの謝肉祭劇『ナイトハルトと菫』では、農民のいたずらによって菫が大便に変わってしまう。それによって無礼講的祝祭空間が創出される。

その造形的表現は、ミゼリコルディアにきわめて大量に現れ、続いて版画にも見られるが、板絵にも少なからず登場する。

大便には、いくつかのタイプがあるが、まずは一人で表現されるタイプ。男が尻を出して屈みこんでいる 1515 年のアールスコート聖母聖堂（Onze-Lieve-Vrouwekerk）肘掛けの排便光景。

小便の表現としてもっとも痛快なのは、シャンポー、旧サン・マルタン教区聖堂のミゼリコルディア（1522 年）である。少年が唐箕に向かって盛大に小便を注いでいる。ブロックによれば、これは「小雨は大風を弱める」という諺を描いたものという。

ミゼリコルディアにおけるスカトロジーは聖職者席下部という場所ゆえに効果的である。聖職者の尻の下に表現された糞尿は、それだけで愉快な連想を引き起こしただろう。主要な観者たる聖職者自身の自虐的なユーモアなのではないだろうか。

日常のリアルな描写としての排尿、排便光景もあり、それが笑いを誘うことがある。糞尿は、それ自体おかしいものなのである。1510 年にフランドルで制作された『グリマーニ聖務日課書』2 月では、子供が戸口から外へ小便をしている。この排尿場面はリアルだが、微笑ましい光景として見られたのだろう。

スカトロジーは、それだけで笑いを生むという、比較的安易な笑いの手法だが、それだけに頻繁に使われるのである。

④　性

謝肉祭劇など中世文化でスカトロジーとともに、此岸性を表現するテーマは性であろう。

性的なイメージには、聖書に由来するものと、それと無関係な世俗的イメージがあるが、まずは世俗的な性イメージを探索しよう。

14 世紀中頃にマーストリヒトで制作された写本『バラ物語』のバ・ド・パージュには、男根の木（Phallisbaum）が描かれている。男根の実を修道女が籠に摘んでいる。右端ではその修道女が修道士と抱擁する。禁欲生活のはずの修道女や修道士への皮肉である。

男根イメージは巡礼者用の金属製バッジ《男根怪物》（1400–50 年頃、ブリュッゲ博物館）にも現れる。大きな男根に２本の足が生え、背に女が乗っている。彼女は背で３つの男根を載せた一輪台車を押している。多分魔除け、厄除けとして使用されたが、性的な笑いを生むものでもあっただろう。

聖書にも沢山エロティックなストーリーはあるが、中世において特に好んで描かれた

のはバテシバの物語だろう。

教会にも、聖人伝ゆえに許されるエロティックな表現がある。特に、聖女殉教図の多くはサディスティックな性的嗜好を示す。コブレンツ、聖フロリンス聖堂では周歩廊壁面の聖女アガタ伝（1300 年頃）で、乳房を切断される残酷なイメージが描かれている。

ミゼリコルディアでは、ほとんど性の例を見ることができない。聖職者席において性的なモティーフはことさら避けられたと推測せざるを得ないのである。露骨なセックスは内陣では忌避されたのである。

⑤ 動物

写本の周辺装飾やミゼリコルディアには共通のモティーフがしばしば登場するが、その中で特に多く見られるのが動物である。

狐に登場願おう。まずはイソップ寓話から狐とコウノトリの物語。狐がコウノトリを招待し平らな皿に食事を盛ったが、コウノトリは嘴が長いので食べられなかった。次にコウノトリは、狐を招待して細長い壺に食事を出す。狐は壺に顔を入れられず、食べることができなかった。「人を欺く者は、欺かれる」という教訓。アールスコート、聖母聖堂の北７番ミゼリコルディア（1515 年）など。

狐が説教師となる場面もある。ナミュール、ヴァルクールの聖マテルヌ聖堂ミゼリコルディアでは、左の説教壇にケープを着た狐が立ち、ガチョウ、雄鶏、２羽のひよっ子に向かって説教をしている。中世物語集『狐ルナール』に基づく。「狐が説教をするときには、汝のガチョウを見ておけ」という諺。説教師への揶揄であることは間違いない。

他にも現実の動物、空想上の動物（怪物）など、様々な生き物が笑いを喚起し、滑稽な姿から笑いを生み出す。

⑥ 諺

ミゼリコルディアには、P・ブリューゲルの絵画に現れることで有名な諺のイメージが、ブリューゲルより以前に登場する。

特にホーホストラーテン、シント・カタリナ聖堂には多数の作例が見られる。このミゼリコルディアは、1532–48 年に制作されたので、ブリューゲルも見ることが可能だった。「柱を噛む人」は、ブリューゲル《ネーデルラントの諺》にも左端前景に登場し、ミゼリコルディアでは修道僧が倒れそうな円柱を両手で支えながら齧っている。この諺は偽善者、あるいは偽善的行為を示している。

(3)各メディアの相互関係について

このように笑いを生むテーマと媒体を概観することで、相互関係が判明するだろう。

笑いを生むテーマは、写本挿絵、ミゼリコルディアから、版画、そしてタブローへと展開していく。

とはいえ例外的なテーマがあり、例えばスカトロジー的テーマは写本には少なく、ミゼリコルディアに多い。その理由は、写本が貴族など高位の人々の媒体であり、私的に美術を受容する際スカトロジーを歓迎はしないからであろう。逆にミゼリコルディアに多いのは、その位置によるだろう。つまり聖職者の尻の下という位置ゆえに、そして集団としての受容が多いがゆえに、スカトロジーが笑いを誘いやすいのであろう。

それに対して性的なテーマは、私的に受容する写本に向いている。たとえ時禱書のような宗教的な書物とはいえ、周辺装飾なら性表現が可能だった。

(4) ユーモア美術の受容者

版画の受容者に関して考察しよう。

シリアは、デューラーの《恋人と死（散歩）》のコピーたるイスラエル・ファン・メッケネム版画（1500 年）の下部に銘文があることに注目した。それは低ドイツ語で「毎日がカーニヴァルということはなく、死がやってきて、

夜をもたらす」と記されている。メッケネムは受容者たちがイメージだけでは版画の意味を理解できないと考えたと推測した。ただし、低ドイツ語を読む能力は有していた、と。

その受容者は、ネーデルラントなどの都市で活動していた市民文学者「修辞家」グループに属する人たちと同程度だったろうという。つまり「半識字者（semiliterate)」なのだ。ラテン語の読み書きはできないが、地域語の読み書きはできる人たちである。

記銘を書かなかったデューラーが想定する顧客はこの程度の図像なら理解可能と考えていたということだろう。この図像なら、ドイツ・ルネサンスの中心地たるニュルンベルクなどには、読解できる人々が多数いるとみなしていたのだ。

では、ミゼリコルディアを見る人はどのような人たちで、どのように見たのであろうか。聖堂の内陣は主に聖職者が列席する空間であった。カミルがいうような「周縁」ではなく、シリアが指摘するように、聖堂参事会員や修道士が集まる共同体を形成する場所であり、その意味では公的空間だった。

ではスカトロジー、動物、怪物、遊戯などのミゼリコルディアのイメージを聖職者たちがどのように受け取ったのだろうか。聖堂の俗信徒が集まる身廊などのイメージと比較すると、ミゼリコルディアには通常キリスト教絵画の用途として言われる「絵による聖書」という役割はほとんどない。観者は主に聖職者たちであるから、言葉で聖書を理解できるはずの彼らにはその必要がなかった。

イングランド、ビヴァリーの聖母マリア聖堂には、注目すべきミゼリコルディアがある。そこでは中央に猿が尿瓶をもち、左の人物へ差し出している。その人物は聖職者で、右手で何か丸いものを差し出している。P・ハードウィックは、聖職者が持っている丸いものをまずは金貨とみなし、さらにホスティア（聖餅）とも見なされるという。ホスティアはキリストの肉の象徴であり、天国への入場券とみなされてもいた。このようにして、ミゼリコルディアのイメージは聖的な意味と同時に、世俗性を含んだ意味を有する両義的なものでもあったのだというのである。

つまりミゼリコルディア図像は内陣ゆえに教訓的な意味もあり、かつ聖職者たちに笑いを引き起こす世俗性も有するモティーフでもあったのではないかと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① 元木幸一、「マクデブルクの二つの笑顔」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第 14 号、2017 年、1–22

〔学会発表〕（計　１　件）

① 元木幸一、「笑顔なのか？–ドイツ、マクデブルク大聖堂の彫刻について–」、第 16 回新約聖書図像研究会（立教大学)、2016 年

〔図書〕（計　２　件）

① 元木幸一、『中世末期ヨーロッパ北方美術におけるユーモア表現　平成 27～29 年度科学研究費・基盤教育(C) 研究成果報告書』、2018 年、1-48 頁
② 元木幸一、竹林舎、「持ち運ばれる祈りの絵–ヘラルト・ダーフィトの小二連画から–」、『祈念像の美術』(田邊幹之助編)、2018 年（印刷中)、293–317

〔その他〕（計２件）

講座

① 元木幸一、「美術で笑う」『山美の美術講座　第二弾』第 1–5 回、山形美術館、2017 年
② 元木幸一、「笑いの西洋美術史」『山美の美術講座』第 1–4 回、山形美術館、2016 年
③

６．研究組織

(1)研究代表者

元木　幸一（　MOTOKI, Koichi　　）
山形大学・その他の部局等・名誉教授
研究者番号：10125669